

アガンベンのアクチュアリティ

——アガンベンはハイデガーをどのように読んでいるのか？

岡田温司

卒論をシモーヌ・ヴェイユで書いたばかりの 24 歳のローマの若造が、幸運なことにも、「最後の哲学者」によるル・トールでのセミナーの数少ない参加者のひとりとなる。このときから、この若者の思考の方向性はある意味で決定されていたといえるかもしれない。若干 28 歳で上梓した美学論『中味のない人間』（1970 年）——感性論としての美学の解体を目論む書——と、その後に着わされた言葉と想像力をめぐる浩瀚な論考『スタンツェ』（1977 年）には、ハイデガーの影が色濃い（まずもって「解体」という身振りそのものがそうだ）。だがもちろん、このドイツの哲学者とのいまだ未完の関係性は、それほど単純な道程ではない。むしろ屈折しているというべきだろう。「～とともに、～に抗して、～を超えて」とは、このイタリアの哲学者がよく使う言い回しだが、誰よりもまずハイデガーこそが——その対蹠地にあるベンヤミンとともに——この「～」に納まる特権的な対象である。

というわけで本発表では、1960 年代から現在に至るまで、アガンベンがハイデガーをどのように読んで対決してきたのかを、具体的にアガンベンのテキストに則するかたちで——しかしクロノジカルにではなくてヒューリスティックに——、以下の四つの観点から辿ってみたい。すなわち、1. 「現存在」と「声」、2. 「芸術作品の根源」と「リズム」、3. 「存在論の考古学」あるいは「様態的存在論」、4. 「動物／人間」の彼岸へ、である。

1 まずもってやはり鍵概念「現存在」から入るのが妥当だろう。アガンベンは『言語活動と死——否定性の場所に関するゼミナール』（1982 年）で、ハイデガー自身の示唆にもよりつつ、「ダーザイン」を「〈Da〉にあること」ではなくて「〈Da〉であること」と読みかえ、この「Da」をヤコブソンの「シフター」およびバンヴェニストの「指示子」に結びつける。つまり、言表においてのみ生起する、それ自体は無意味で空虚な語である。さらに、「現存在」の本質としての「気分 *Stimmung*」と、呼びかけとしての「声 *Stimme*」との語源的關係に注目するアガンベンは、言語活動が生起するまさにその瞬間に結びつく「声」をシフターとして解釈する。

2 「気分」の語源が音響的次元にあるとするなら、それはまた芸術の問題とも交差してくる。処女作『中味のない人間』において、芸術は感性論（カント）や「意志の形而上学」（ニーチェ）から切り離されて、ギリシア語の「ポイエーシス」へと引き戻され「真理」とのつながりが強調されるが、ここには明らかにハイデガーの影響が認められる。さらにヘルダーリンにも依拠しつつ芸術作品の根源的構造が「リズム（リュトモス）」に求められるが、流れのうちに分裂や中断を導き入れる接続としてのこの「リズム」は「脱自 *ek-stasis*」とも結びつけられる。さらにアガンベンはハイデガーの「性起 *Ereignis*」を「それ自体において脱自体化である」とみなし、「自体的 *eigentlich*」と「非自体的 *uneigentlich*」との弁証法として読み解く。

3 ハイデガーにおける「存在」と「存在者」との関係性のブレは、これまでもしばしば指摘されているが、存在論の系譜学を辿りなおした近著『身体の使用』（2015年）において、アガンベンはこのアポリアを、スピノザによる「様態 *modus*」と「コナトゥス *conatus*」の概念を補助線に引くことで、「様態的存在論 *ontologia modale*」として読み替えることを提案する。つまるところ存在とは変化様態のことである。この「様態」はまた「存在のリズミ的な性格」とも呼ばれるが、アガンベンにおいて「リズム」は生と芸術とをつなぐ重要な概念となる（「生 - の - 形式 *forma-di-vita*」）。

4 存在自体がその存在様態において問題になるという現存在の循環的構造において、問題含みのままに残されているのは、アガンベンによれば、動物と人間の関係性である。動物／人間の分割線をめぐる生政治的言説——「人類学機械」——の系譜を跡づける『開かれ』（2002年）において、ハイデガーはその最後のものとして位置づけられるが、ここでアガンベンが特に注目するのは、動物の「放心」と現存在の根本的「気分」としての「倦怠」とが酷似しているという点である。これをアガンベンは分割そのものを無為なものとする、と肯定的に読みかえる。このことは翻って、「無為 *inoperosità*」や「非の潜勢力 *adynamia*」——現勢態へと移行することのない潜勢態——をめぐるアガンベン独特の思考ともつながるが、それとハイデガーの「放下 *Gelassenheit*」との関係性については、さらに検討が必要となるだろう。